

いじめに対する態度と価値観

とくに小・中学生の場合

鈴木 康 平

Pupils' Attitudes towards Bullying in School and their Sense of Values.

Kouhei SUZUKI

(Received May 21 1990)

In a previous study, data was obtained from sophomores, student-teachers and class teachers concerning their opinions and perceptions of the causes of bullying in schools. The next stage was to extend this investigation to schoolboys and schoolgirls themselves. By this means we hoped to discover relationships between attitudes towards bullying in school and the pupils' sense of values and attitudes to life.

A group of elementary school and junior high school boys and girls were tested for their response on nine different opinions about bullying in school and its possible eradication. These responses were checked against subjects' further responses to questions of their attitudes to life, expressed in a five-point scale. Among many correlations, the most striking was the strong relationship between firm belief in the possibility of eradicating school bullying and a belief in the innate goodness of human beings.

Kew words : bullying, sense of values, eradication of bullying, innate goodness.

問 題

筆者はこれまで、いじめについての発達社会心理学的な考究を続けてきている（鈴木ら, 1986, 鈴木1986 a, 1986 b, 1987, 1989 a, 1989 b, 1989 c, 鈴木ら, 1989 a, 1989 b）。そのアプローチの仕方には紆余曲折があったが、その底を一貫して流れているものとして、いじめ根絶にかかわるその個人の考え—すなわち、いじめは根絶できるはずであると考えているか、その根絶は不可能であると考えているか——を基底において、いじめに対する態度、いじめに対する許容度、対策等を追究することにより、いじめの心理力動の解明に資するところが大きく、同時にそれが、発達の視点をもちこんだ社会心理学的アプローチとして重要な意義をもつものとなりうるとの考えがある。そして、そのことは、質問紙調査法を中心とする方法によって、小学生、中学生から、大学生、現職教師に至るまでの多くの被調査者達から得られたデータが力強く支持してくれてきている。筆者の昨年（1989年）の調査によってその一端が見えはじめてきたいじめの根絶視の程度といじめの許容度との関連の深さなどはその一例である。

もちろん、筆者は、いじめを、とりわけ学校における子ども相互のいじめを、単にひとつの研究対象の事象として、冷やかにつきはなして眺めてみて、分析してことたれりと考えてきたわけでは

本報告は、平成元年度科学研究費による研究（総合(A)・課題番号01301010）「価値観の形成とその規定因に関する社会心理学的研究」（代表・東京大学・古畑和孝）のうち、分担課題「価値からの逸脱としてのいじめ——発達社会心理学的アプローチ——」にかかわる研究である。

決してない。教育の実践にかかわりをもつものの一人として、いじめの実態にすこしでも鋭くせまり、そこで得られた知見が、流す必要のない悔し涙、うらみの涙を生じさせないような教育実践に向けての、何がしかのあと押しになればこれに過ぎる幸せはないとの思いをこめて、「いじめ」研究にとり組んできたつもりである。

そこで本報告では、これまでの、いじめに対する態度の分析の視点に加えて、人の生きゆく道——人生観というにしてはあまりにも仰々しすぎるきらいがあるが——、人間に対する観方、あるいは価値観とのかかわりの点からも検討を加える試みを開始したところを論述する。その意味で、本報告は、いじめ解明へ向けて、従前のいじめ根絶視の観点からのアプローチを深めていくとともに、筆者なりに設定した新しい方向への出発の第一歩ともいうべきものとなろう。

いじめの実態の把握は、常にこの種の研究では必要かつ不可欠なものゆえ、それをふまえつつ、ここでは、とくに、①いじめ根絶視の程度と、いじめに対する許容度との関連についてのより深い追究、②いじめ根絶視の程度と、人間観にかかわる意見・態度との関連の探索・追究、この2点を主眼として研究を展開することを目的とする。

方 法

調査対象者：小学4年生 106名（男子54名，女子52名），小学5年生 106名（男子52名，女子54名），中学2年生 319名（男子 165名，女子 154名）

教 示 者：小学校では学級担任，中学校では本学部心理学専修学生8名（各学級に1名ずつ）。

調査方法：質問紙調査法による（調査用紙は，本文末に掲げる）。上記教示者による学級集団毎の一斉集合調査

調査期日：平成2年3月，協力学級の都合のつく日時に実施。

質問紙調査票の構成の概略

○形式：無記名；自由記述，多肢選択，5段階評定尺度形式など。

○内容構成：

1. いじめられた経験の有無とその時の心情など
2. いじめた経験の有無とその時の心情など
3. いじめを見た経験の有無とその時の心情など
4. いじめ根絶視の程度と，いじめについての9箇の意見に対する賛成—反対の度合いの測定
5. 日常生活の一端と人間観（性善説、性悪説）
6. Sprangerによる生活の6類型の提示による生活態度の把握（續有恒ら1959より）
7. 青木誠四郎らによる生活の態度の6パターンの提示による生活態度，生き方の把握（大西誠一郎1971より）
8. 續有恒らによる「幸福のための必須要因」の提示による幸福観の把握（續有恒ら1955より）

結 果

以下のデータ整理・分析にあたって中心的な要因としてとり扱ういじめ根絶視の程度による群分けは、次の通りである。即ち、調査項目④の10、「いじめは人間のいるところには必ずあり、決してありません」に対して、「おおいに反対」か「まあ反対」にチェックした被調査者群を「いじめ根絶可能視群」(POと略記)、「どちらともいえない」にチェックした被調査者群を「中間群」(MDと略記)、「おおいに賛成」「まあ賛成」にチェックした群を「いじめ根絶不可能視群」(IMPと略記)とする。なお、いじめに対する各種の意見や、人生観、価値観などに関する項目のうち、5段階評定尺度形式のものへの応答はそのまま、それをその該当項目への得点とみなし、それを基に、平均、標準偏差等の算出をすることとする。

1. いじめの実態の把握

1-1. いじめられた経験の有無

これについて、学年(小学4年、小学5年、中学2年)と、根絶視の程度の3群(PO, MD, IMP)の要因の組み合わせを基に、いじめられた経験の有無の出現率をからめて3次元表にして3要因の尤度比検定(Model 3 with fixed AB and C)にかけ、さらに、残差分析を施した(表1-1-a, 表1-1-b)。なお、「学年」と「根絶視群」それぞれの要因と、いじめられた経験の有無との関連については、表1-2、および表1-3に独立してまとめて示す。

これらから、いじめられた経験の有無は、学年と有意な関係があることがわかる。すなわち、本研究での対象者中、最下級生の小学4年生がいじめられた経験が最も高率で、小学5年、中学2年と学年があがるに従ってその率が減少していつている。群(B)×経験(C)は有意ではない。つまり、いじめ根絶視の程度といじめられた経験の多少とは関連がないということを示す。

1-2. いじめた経験の有無

このことについても、前項1-1いじめられた経験と同じく、学年と根絶視の程度の群の2つの要因と、いじめた経験の有無のかかわりを、3次元の表にして示し、それをもとに3要因の尤度比検定、さらに残差分析をおこなった(表2-1-a, 表2-1-b)。なお、学年、群別の要因を独立させその各々について、いじめた経験の出現率を表にまとめたものも前項と同じである。それらは、表2-2、表2-3に示される。

これらによると、学年別によるいじめの経験の有無、群別によるいじめの経験の有無の効果はともに有意である。学年が低いほどいじめの経験が多く、MD及びPO群にくらべて、IMP群はいじめの経験率が有意に高いといえる。

1-3. いじめを見た経験の有無

これについても、前2項と同様の整理、検定を施してみた(表3-1-a, 3-1-b, 及び表3-2, 表3-3)。これらによると、いじめを見た経験は、学年の高低に大きくかかわっていることがわかる。低い学年ほどその出現率が高い。しかし、いじめ根絶視の程度による3群間の「いじめを見た経験」の出現率に有意な差はなかった。

2. いじめ根絶視の程度といじめに対する態度

前述の通り、調査項目④-10)の項目への応答(チェック)を基にして、PO, MD, IMPの3群を根絶視の程度による群分けとしたが、ここでも、その3群と、他の9項目の意見項目への応答を整理し、検討する。

表 1-1-a いじめられた経験の有無

人数と(%)

学 年 (A)	群 (B)	いじめられた経験 (C)		計	残 差 分 析 - 調整後の残差 -	
		有	無			
小学 4 年	P O	18 (69.23)	8 (30.77)	26 (100.00)	4.76**	-4.76**
	M D	19 (55.88)	15 (44.12)	34 (100.00)	3.70**	-3.70**
	I M P	32 (69.57)	14 (30.43)	46 (100.00)	6.51**	-6.51**
小学 5 年	P O	11 (39.29)	17 (60.71)	28 (100.00)	1.33	-1.33
	M D	18 (41.86)	25 (58.14)	43 (100.00)	2.07*	-2.07*
	I M P	11 (31.43)	24 (68.57)	35 (100.00)	0.43	-0.43
中学 2 年	P O	19 (17.76)	88 (82.24)	107 (100.00)	-2.70**	2.70**
	M D	10 (7.87)	117 (92.13)	127 (100.00)	-5.85**	5.85**
	I M P	12 (14.12)	73 (85.88)	85 (100.00)	-3.16**	3.16**

表 1-1-b 表 1-1-a の 3 次元表にもとづく 3 要因尤度比検定 (Model 3 with fixed AB and C)

変 動 源	df	χ^2_L	p
学年 (A) × 経験 (C)	2	109.833	.01
群 (B) × 経験 (C)	2	4.931	ns
(A) × (B) × (C)	4	3.261	ns
全 体	8	118.025	.01

表 1-2 いじめられた経験の有無 (学年)

人数と(%)

学 年	いじめられた経験		計	残 差 分 析 - 調整後の残差 -	
	有	無			
小学 4 年	69 (65.09)	37 (34.91)	106 (100.00)	9.42**	-9.42**
小学 5 年	40 (36.70)	66 (63.30)	106 (100.00)	2.43**	-2.43**
中学 2 年	41 (12.85)	278 (87.15)	319 (100.00)	-9.67**	9.67**

$$\chi^2_L = 109.833 \quad df = 2 \quad p < .01$$

表 1-3 いじめられた経験の有無 (群)

人数と (%)

群	いじめられた経験		計	残 差 分 析 - 調整後の残差 -	
	有	無			
P O	48 (29.81)	113 (70.19)	161 (100.00)	0.53	-0.53
M D	47 (23.04)	157 (76.96)	204 (100.00)	-2.11*	2.11*
I M P	55 (33.13)	111 (66.87)	166 (100.00)	1.69*	-1.69*

$$\chi^2_L = 4.931 \quad df = 2 \quad ns$$

表 2-1-a いじめた経験の有無

人数と(%)

学 年 (A)	群 (B)	いじめた経験 (C)		計	残 差 分 析 - 調整後の残差 -	
		有	無			
小学 4 年	PO	6 (23.08)	20 (76.92)	26 (100.00)	-0.80	0.80
	MD	18 (52.94)	16 (47.06)	34 (100.00)	3.00**	-3.00**
	IMP	25 (54.35)	21 (45.65)	46 (100.00)	3.75**	-3.75**
小学 5 年	PO	10 (35.71)	18 (64.29)	28 (100.00)	0.66	-0.66
	MD	11 (25.58)	32 (74.42)	43 (100.00)	-0.68	0.68
	IMP	17 (48.57)	18 (51.43)	35 (100.00)	2.46*	-2.46*
中学 2 年	PO	28 (26.17)	79 (73.83)	107 (100.00)	-1.00	1.00
	MD	24 (18.90)	103 (81.10)	127 (100.00)	-3.16**	3.16**
	IMP	21 (24.71)	64 (75.29)	85 (100.00)	-1.19	1.19

表 2-1-b 表 2-1-a の 3 次元表にもとづく 3 要因尤度比検定 (Model 3 with fixed AB and C)

変 動 源	df	χ^2	p
学年 (A) × 経験 (C)	2	22.076	.01
群 (B) × 経験 (C)	2	6.951	.05
(A) × (B) × (C)	4	7.297	ns
全 体	8	36.323	.01

表 2-2 いじめた経験の有無 (学年)

人数と(%)

学 年	い じ め た 経 験		計	残 差 分 析 - 調整後の残差 -	
	有	無			
小学 4 年	49 (46.23)	57 (53.77)	106 (100.00)	4.04**	-4.04**
小学 5 年	38 (35.85)	68 (64.15)	106 (100.00)	1.43	1.43
中学 2 年	73 (22.88)	246 (77.12)	319 (100.00)	-4.47**	4.47**

$$\chi^2 = 22.076 \quad df = 2 \quad p < .01$$

表 2-3 いじめた経験の有無 (群)

人数と(%)

群	い じ め た 経 験		計	残 差 分 析 - 調整後の残差 -	
	有	無			
PO	44 (27.33)	117 (72.67)	161 (100.00)	-0.93	0.93
MD	53 (25.98)	151 (74.02)	204 (100.00)	-1.65†	1.65†
IMP	63 (37.95)	103 (62.05)	166 (100.00)	2.65**	-2.65**

$$\chi^2 = 6.951 \quad df = 2 \quad p < .05$$

表 3-1-a いじめを見た経験の有無

人数と(%)

学 年 (A)	群 (B)	いじめを見た経験 (C)		計	残 差 分 析	
		有	無		- 調整後の残差 -	
小学 4 年	P O	16 (61.54)	20 (38.46)	26 (100.00)	1.66**	-1.66**
	M D	18 (52.94)	16 (47.06)	34 (100.00)	0.87	-0.87
	I M P	27 (58.69)	19 (41.31)	46 (100.00)	1.84**	-1.84**
小学 5 年	P O	19 (67.86)	9 (32.14)	28 (100.00)	2.41*	-2.41*
	M D	20 (46.51)	23 (53.49)	43 (100.00)	0.10	-0.10
	I M P	17 (48.57)	18 (51.43)	35 (100.00)	0.35	-0.35
中学 2 年	P O	43 (40.19)	64 (59.81)	107 (100.00)	-1.30	1.30
	M D	43 (33.86)	84 (66.14)	127 (100.00)	-3.09**	3.09**
	I M P	40 (47.06)	45 (52.94)	85 (100.00)	0.26	-0.26

表 3-1-b 表 3-1-a の 3 次元表にもとづく 3 要因尤度比検定 (Model 3 with fixed AB and C)

変 動 源	df	χ^2	p
学年 (A) × 経験 (C)	2	13.128	.01
群 (B) × 経験 (C)	2	5.070	ns
(A) × (B) × (C)	4	2.710	ns
全 体	8	20.904	.01

表 3-2 いじめを見た経験の有無 (学年)

人数と(%)

学 年	いじめを見た経験		計	残 差 分 析	
	有	無		- 調整後の残差 -	
小学 4 年	61 (57.55)	45 (42.45)	106 (100.00)	2.72**	-2.72**
小学 5 年	56 (52.83)	50 (47.17)	106 (100.00)	1.63	-1.63
中学 2 年	126 (39.50)	193 (60.50)	319 (100.00)	-3.55**	3.55**

$$\chi^2 = 13.123 \quad df = 2 \quad p < .01$$

表 3-3 いじめを見た経験の有無(群)

人数と(%)

群	いじめを見た経験		計	残 差 分 析	
	有	無		- 調整後の残差 -	
P O	78 (48.45)	83 (51.55)	161 (100.00)	0.82	-0.82
M D	81 (39.71)	123 (60.29)	204 (100.00)	-2.21*	2.21*
I M P	84 (50.60)	82 (49.40)	166 (100.00)	1.51	-1.51

$$\chi^2 = 5.070 \quad df = 2 \quad ns$$

それらの、平均、標準偏差が表4-1に示されている。その表をもとにして、独立した3要因の分散分析(学年×性別×根絶視群)をおこなった。その結果を表4-2に示す。さらに、いじめ根絶視3群別の、各意見項目に対する平均値、ならびに、平均値間の多重比較をTukey法によっておこなった結果を図示したのが図1である。

これらの表および図から、次のことが見出せる。

まず全般にわたることがらとして、意見項目[1]と[5]を除いて他の7項目すべてにおいて、根絶視の群の主効果が有意であった(表4-2参照)。この点は、筆者が昨年発表した「いじめに対する教育学部2年次生・教育実習生・現職教師の認識」(鈴木1989b)の研究において見出された傾向と驚くほど似ているのであり、年齢の如何を問わず、根絶視の程度の観点から、かくも明確な特定の傾向が発見され得たことは(そして、別の機会に協力し回答してもらった被調査者群、小学・中学生の場合も同様の傾向であったこともふまえて—鈴木(1989a)—)、この、いじめ根絶可能・不可能の視座が、何か非常に重大なものを、いじめ解明の上に、秘めているように思われてならないのである。

では、ひとつひとつの意見項目についての応答の概要を説明する(とくに図1を参照)。

- 意見項目1) 「いじめは人間のひどい心のあらわれで、人間としてなさけないおこないです」これに対しては、OP, MD, IMP 群いずれも強く賛成し、その強さ(平均値間)に有意差はなかった。

表4-1 いじめについての各意見項目に対する学年別、性別、群別の平均(M)と標準偏差(SD)と群別人数(n)

学 年	性	項目群	[1]		[2]		[3]		[4]		[5]		[6]		[7]		[8]		[9]		n
			M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
小学 4年	男	PO	4.33	(0.94)	2.42	(0.86)	3.00	(1.16)	2.33	(0.85)	3.50	(1.12)	2.58	(1.26)	2.67	(0.94)	3.58	(0.95)	2.75	(1.01)	12
		MD	4.21	(1.15)	2.43	(1.35)	1.79	(1.08)	1.79	(0.94)	3.57	(1.29)	1.86	(0.09)	2.21	(1.15)	3.36	(1.29)	2.71	(1.16)	14
		IMP	4.18	(1.20)	2.79	(1.21)	2.46	(1.15)	2.39	(1.24)	3.18	(1.39)	2.64	(1.17)	2.89	(1.18)	3.11	(1.29)	3.11	(1.15)	28
	女	PO	4.43	(0.62)	2.21	(1.15)	1.57	(0.98)	2.21	(1.21)	4.21	(0.86)	2.14	(1.06)	2.71	(1.16)	3.86	(0.99)	2.93	(0.80)	14
		MD	4.40	(0.74)	2.35	(1.20)	1.85	(0.85)	2.75	(1.22)	3.85	(1.11)	3.05	(0.92)	2.85	(1.15)	3.15	(1.24)	3.25	(1.04)	20
		IMP	4.22	(0.98)	2.50	(1.01)	2.22	(0.92)	2.39	(1.16)	3.72	(1.19)	2.61	(0.96)	2.61	(1.16)	3.00	(1.11)	3.00	(1.00)	18
小学 5年	男	PO	4.00	(1.46)	2.14	(1.41)	1.93	(1.03)	2.00	(1.46)	3.29	(1.33)	1.50	(0.82)	1.93	(1.03)	2.57	(1.64)	2.36	(1.17)	14
		MD	4.48	(0.65)	2.13	(0.90)	2.04	(1.12)	2.61	(1.13)	3.74	(1.19)	2.44	(1.25)	2.22	(0.93)	3.44	(1.25)	2.96	(0.91)	23
		IMP	3.87	(1.02)	3.00	(1.21)	2.20	(1.22)	2.33	(1.25)	3.27	(1.44)	2.33	(1.30)	2.27	(1.06)	3.00	(1.32)	3.20	(1.17)	15
	女	PO	4.43	(1.18)	1.36	(0.72)	1.36	(0.61)	1.50	(0.73)	4.21	(1.42)	1.50	(0.73)	1.86	(0.83)	4.00	(1.36)	2.00	(0.85)	14
		MD	4.50	(0.59)	2.25	(0.94)	1.90	(0.83)	1.95	(0.92)	4.15	(1.15)	2.30	(1.01)	2.40	(0.92)	3.70	(1.05)	2.70	(0.78)	20
		IMP	4.65	(0.57)	2.70	(1.49)	1.95	(1.07)	2.80	(1.50)	4.15	(1.11)	2.60	(1.24)	2.35	(1.06)	3.75	(0.99)	2.70	(1.15)	20
中学 2年	男	PO	4.61	(0.87)	1.78	(0.83)	1.78	(0.94)	2.17	(1.29)	3.93	(1.40)	1.94	(0.91)	2.07	(1.14)	3.94	(1.21)	2.37	(1.04)	54
		MD	4.25	(1.02)	2.26	(1.01)	2.08	(0.98)	2.18	(1.22)	3.93	(1.17)	2.13	(0.97)	2.18	(0.93)	3.84	(1.12)	2.72	(0.99)	61
		IMP	3.92	(1.20)	2.56	(0.94)	2.26	(1.02)	2.38	(1.16)	3.92	(1.07)	2.60	(1.06)	2.84	(0.97)	3.48	(1.27)	3.08	(0.85)	50
	女	PO	4.34	(0.97)	1.94	(0.83)	1.87	(1.08)	0.85	(0.98)	3.64	(1.43)	2.06	(1.04)	1.91	(0.92)	3.70	(1.35)	2.32	(1.10)	53
		MD	4.30	(0.90)	2.35	(0.99)	1.94	(0.94)	2.02	(0.91)	4.08	(1.12)	2.12	(0.90)	2.38	(0.95)	3.79	(1.14)	2.82	(0.95)	66
		IMP	4.90	(0.87)	2.83	(0.97)	2.09	(1.16)	2.46	(1.16)	3.69	(1.09)	2.29	(1.03)	2.54	(1.18)	3.11	(1.12)	3.34	(0.86)	35

(註) 表頭「1」から「9」までの項目の番号は調査項目④を構成する意見項目番号に該当する。その内容は本文末調査用紙と図1を参照されたい。

表4-2 表4-1の資料にもとづく3要因分散分析の結果(F値を示す)

項目		[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]	[7]	[8]	[9]
変 動 源	df	F	F	F	F	F	F	F	F	F
学年 A	2	0.116	1.220	1.949	0.479	0.786	4.533*	7.451***	2.129	2.838†
性 B	1	2.811†	1.132	8.806***	0.068	8.751***	0.456	0.120	2.401	0.044
群 C	2	1.825	17.018***	2.966*	4.741***	1.138*	9.553***	4.607*	3.273*	11.821***
A×B	2	1.605	1.954	1.608	1.716*	4.160*	0.737	0.386	6.389***	2.858†
A×C	4	0.998	1.598	1.829	1.171	0.440	2.243†	1.565	1.599	1.526
B×C	2	0.660	0.748	2.585†	1.517	0.166	1.781	2.125	1.404	0.513
A×B×C	4	0.788	0.740	2.211†	2.313†	0.551	3.151*	0.423	0.833	0.496
誤差	513									

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

2. 意見項目2) 「いじめは悪いことだけれど、もともと人間の心の中にある気もちだから(いじめがあっても)しかたがないことです」これに対しては、PO 群が最も強く反対し、MD 群がそれに続き、IMP 群が最も弱い反対を示している。3 群の平均値についても Tukey 法による多重比較をおこなったところ、3 群間のそれぞれの2 群の組み合わせすべての間に有意な差が見出された ($p < .01$)。
3. 意見項目3) 「いじめは、いじめるわけがしっかりしている時は、(いじめを)ゆるされます(いじめてもよい)」この意見に対しても、PO 群が最も強い反対、MD 群が、ほぼそれと同程度、そして IMP が最も弱い反対となっておりあらわれている。Tukey 法による多重比較の結果、PO < IMP, MD < IMP (平均が低いほど反対の傾向が強い)の傾向があると5%の有意水準でいえる。
4. 意見項目4) 「いじめは人間のしぜんのおこないで、よいとか悪いとかの問題ではありません」これについては、PO 群にくらべて、IMP 群の方が、弱い反対(むしろ、どちらともいえないに近いほう)を示している ($p < .01$ Tukey 法による)。
5. 意見項目5) 「いじめは人間として、最低のおこないです」これについては、PO 群、MD 群、IMP 群3 群ともおおむね賛成の意向が示され、有意差はなかった。
6. 意見項目6) 「いじめは人間のしぜんなおこないで、いじめられる方が、それによってか

表5-1 日常生活、人間観などに対する、学年別、性別、群別の応答：平均(M) 標準偏差(SD)

学 年	性	項目群	[1]		[2]		[3]		[4]		[5]		[6]	
			M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
小学 4年	男	PO	2.92	(1.26)	4.00	(0.82)	3.42	(0.49)	3.00	(0.71)	2.33	(1.03)	3.25	(0.43)
		MD	2.93	(1.22)	3.93	(0.70)	3.21	(1.01)	3.29	(0.96)	2.36	(1.11)	3.14	(0.99)
		IMP	2.75	(1.41)	4.29	(0.88)	3.00	(0.71)	3.00	(1.17)	2.25	(1.41)	2.86	(1.06)
	女	PO	2.86	(1.06)	3.79	(1.08)	2.79	(0.67)	3.36	(0.90)	2.79	(1.26)	3.07	(1.22)
		MD	3.05	(0.97)	4.25	(0.54)	3.10	(0.44)	3.05	(0.74)	2.90	(0.77)	3.40	(0.80)
		IMP	2.78	(1.13)	4.33	(0.75)	3.39	(0.59)	3.11	(0.81)	2.56	(1.34)	3.72	(1.19)
小学 5年	男	PO	2.43	(1.18)	4.07	(1.03)	3.00	(1.00)	3.29	(0.80)	3.00	(1.36)	3.57	(1.05)
		MD	2.48	(1.38)	3.91	(1.02)	2.91	(1.02)	3.13	(0.99)	3.09	(1.10)	3.35	(1.09)
		IMP	2.73	(1.34)	3.87	(0.81)	3.07	(0.44)	2.53	(0.96)	1.67	(0.47)	2.80	(0.98)
	女	PO	3.07	(0.96)	4.36	(1.04)	3.29	(0.59)	3.00	(0.76)	3.29	(1.28)	3.86	(0.83)
		MD	2.65	(0.91)	4.50	(0.81)	3.30	(0.64)	2.90	(0.44)	2.75	(0.70)	3.35	(0.65)
		IMP	3.15	(1.11)	4.30	(1.10)	3.00	(0.84)	3.75	(1.09)	2.55	(1.20)	3.25	(0.94)
中学 2年	男	PO	3.30	(1.12)	3.46	(1.17)	3.13	(0.72)	2.98	(1.13)	3.09	(1.30)	3.39	(0.99)
		MD	3.23	(1.02)	3.28	(1.10)	3.00	(0.77)	3.36	(0.89)	2.49	(1.22)	3.02	(1.43)
		IMP	2.98	(1.07)	2.88	(1.23)	3.22	(0.76)	3.04	(0.96)	2.54	(1.17)	3.16	(1.12)
	女	PO	3.32	(1.06)	3.76	(1.15)	3.30	(0.77)	3.43	(0.84)	3.17	(1.23)	3.83	(0.97)
		MD	3.46	(0.89)	3.80	(1.08)	3.11	(0.63)	3.20	(0.93)	3.00	(0.94)	3.58	(0.82)
		IMP	3.51	(0.91)	3.69	(1.39)	3.11	(0.79)	3.37	(0.93)	2.83	(0.88)	3.49	(0.81)

(註) 表頭 [1] から [13] までの番号は調査項目⑤を構成する13個の項目の番号に該当する。それらは [1] 友達

[4] 自分のまわりの人の方が幸せそう [5] 他の人の成功を喜ぶ [6] 他の人の失敗を悲しむ [7] 性善説

[13] 異質の排除 である。

えて強くなっていくので、よいところがあります」これについては、Tukey 法による平均の多重比較の結果、IMP > PO, MD > PO といずれも 1%水準で平均値間に有意な差があった。これは、IMP と MD 群が PO 群よりもこの考えに弱い反対を示し、PO 群が、非常に強く反対を示したものである。

7. 意見項目 7) 「いじめは悪いことですが、いじめられる方もそれによって強くなっていくのだから必要なところもあります」これについても、PO 群が、他の 2 群にくらべて、有意に (1%水準) 強く反対の気持ちを表明していることが見出せた。

8. 意見項目 8) 「いじめは、どんなわけがあってもゆるされません」これについては、PO 群が最も強く賛成、ついで MD 群、そして IMP 群が最も弱く賛成という傾向が見出された。ちなみに、Tukey 法による検定において、PO > IMP, MD > IMP (いずれも $p < .05$ の結果であった。

9. 意見項目 9) 「いじめは悪いことですが、いじめられる方にも、悪いところがあるはずだから (いじめがあっても) やむをえません」

これについては PO 群が「まあ反対」、MD 群が、それより弱く反対、IMP が「どちらともいえない」程度の反応を示している。ちなみに IMP > PO ($p < .01$), MD > PO ($p < .05$)となっている。(Tukey 法による平均の多重比較)。

[7]		[8]		[9]		[10]		[11]		[12]		[13]	
M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
3.67	(0.03)	2.67	(1.31)	3.58	(0.95)	3.50	(0.87)	2.17	(0.28)	2.08	(1.12)	2.50	(0.76)
3.71	(0.88)	3.14	(1.36)	3.93	(1.03)	3.71	(0.88)	2.14	(1.25)	2.21	(1.15)	2.93	(1.28)
3.75	(1.15)	2.93	(1.44)	3.79	(1.11)	3.14	(0.86)	1.89	(1.26)	2.00	(1.10)	2.57	(1.05)
3.93	(1.10)	2.21	(1.26)	3.50	(1.12)	3.21	(1.26)	1.64	(1.11)	1.79	(0.77)	2.00	(0.93)
3.45	(0.97)	2.40	(0.97)	3.55	(0.67)	3.65	(0.79)	1.65	(0.85)	1.95	(0.74)	2.50	(0.81)
4.00	(0.94)	2.78	(1.23)	3.67	(1.16)	3.28	(1.04)	1.78	(1.32)	2.11	(1.24)	2.56	(1.34)
3.93	(1.28)	2.43	(1.64)	3.79	(0.86)	3.36	(1.29)	1.57	(1.05)	2.00	(1.25)	2.07	(1.16)
3.17	(1.27)	2.70	(1.23)	3.87	(0.95)	3.17	(1.09)	2.22	(1.21)	1.83	(1.13)	2.22	(0.93)
3.07	(1.39)	3.07	(1.44)	3.33	(1.25)	3.27	(1.00)	1.93	(1.00)	2.40	(1.25)	2.00	(1.03)
3.93	(0.94)	2.14	(1.19)	3.50	(0.98)	2.57	(0.98)	1.50	(0.82)	1.29	(0.59)	3.14	(1.06)
2.95	(1.12)	2.45	(1.02)	3.90	(0.77)	3.00	(1.00)	1.70	(0.78)	1.95	(0.97)	2.20	(0.93)
3.20	(1.33)	2.25	(1.22)	3.85	(0.96)	2.95	(1.16)	1.90	(1.04)	1.80	(0.98)	2.10	(0.94)
4.50	(0.79)	3.00	(1.48)	3.83	(0.86)	3.48	(1.01)	1.44	(0.76)	1.90	(1.18)	2.76	(1.35)
4.18	(0.90)	3.26	(1.27)	3.41	(1.03)	3.38	(1.10)	1.75	(1.02)	2.00	(1.04)	2.82	(1.12)
4.48	(0.83)	3.66	(1.38)	3.62	(0.98)	3.20	(1.04)	1.78	(0.99)	2.00	(0.92)	2.66	(1.23)
4.62	(0.62)	2.51	(1.44)	3.74	(0.94)	3.19	(1.05)	1.47	(0.82)	1.87	(0.95)	2.89	(1.09)
4.44	(0.70)	2.79	(1.45)	3.23	(0.76)	3.26	(0.89)	1.39	(0.74)	2.20	(0.97)	2.58	(1.00)
4.09	(1.03)	3.40	(1.31)	3.14	(1.07)	3.14	(1.15)	1.74	(0.91)	2.63	(1.10)	2.67	(1.17)

への同調 [2] 学校での出来事の家人への報告文での出来事の家人への報告 [3] 学校で認められているとの感触

[8] 性悪説 [9] 苦しいことへの挑戦 [10] 協調と忍耐 [11] ひとり遊びを好む [12] 村八分もしかたなし

以上を概括してみると、9箇の意見項目については[1]と[5]を除いて、根絶視3水準の程度に応じた応答がなされていることが明確に示されたといえる。

3. いじめ根絶視の程度と、日常生活、人間観（性善説、性悪説など）

ここでは、いじめ根絶視の程度と、調査項目⑤を構成する13の日常生活場面及び人間観にかかわるところの資料の整理と検討をおこなう。表5-1に調査項目⑤を構成する13箇の質問項目について、学年、性、根絶視の3要因をからめて、その各々の平均、標準偏差を示す。前項④の調査項目における質問項目群の整理と同様、ここでも、5段階評定尺度への応答値そのものを得点とみなし、1点から5点を与えた。この表をもとに、独立した3要因（学年3水準）×性（2水準）×根絶視（3水準）の分散分析をおこなったところ、表5-2に示すような結果がえられた。

ここで、根絶視の程度と特に深くかかわりのあることがわかった項目は次の3つである。

質問項目5)「クラスのある人がとてもよい成績をあげたらうれしい」

これに対して、群の主効果が有意 ($F=7.468$ $df=2/513$, $p<.001$) であった。ちなみに、PO群の平均は3.04 標準偏差1.277, $n=161$, MD 群はそれぞれ, $M=2.78$, $SD=1.060$, $n=204$, IMP 群は $M=2.48$, $SD=1.181$, $n=166$ で、3群の中ではPO群が最も強くこれに賛意を示し、以下 MD, IMP 群と反対の傾向が強まる。Tukey 法による平均値の多重比較の結果、PO群とIMP 群, MD 群とIMP 群の間に、いずれも1%の水準で有意差があった。

質問項目6)「クラスのある人がとてもおおきな失敗をしたらかなしい」

この項目に対する3要因の分散分析の結果、群の主効果は10%の水準で有意な傾向にあることが示された ($F=2.825$, $df=2/513$, $p<.10$)。PO群の平均は3.55, 標準偏差は1.00, MD 群は $M=3.31$, $SD=0.94$, IMP 群は $M=3.22$, $SD=1.06$ であって、PO群とIMP 群, PO群とMD群の平均値間に5%水準で有意な差が生じていた。つまり、PO群は他の2群に比べて、この質問項目のような状況の場合、かなしいと感じる程度が強いといえよう。

質問項目7)「人間はもともと（うまれた時から）よいところをもっている」

これについては、根絶視群の主効果が0.1%水準で有意であった ($F=7.278$, $df=2/513$, $p<.001$)。ちなみに、PO群の平均は4.33, 標準偏差は0.92, MD群のそれらは, $M=3.93$, $SD=1.07$, IMP 群は $M=3.94$, $SD=1.17$ であった。Tukey 法による平均の多重比較の結果 PO 群の平均値と、MD及び、IMP 群のそれとの間に、それぞれ、1%水準で有意差があることが示された。すなわち、PO群つまり、いじめは根絶できると思っている群は、「人間はもともとよいところをもっている」と、他の2群の被調査者達より、有意に強くそう思っていることが示されたわけである。

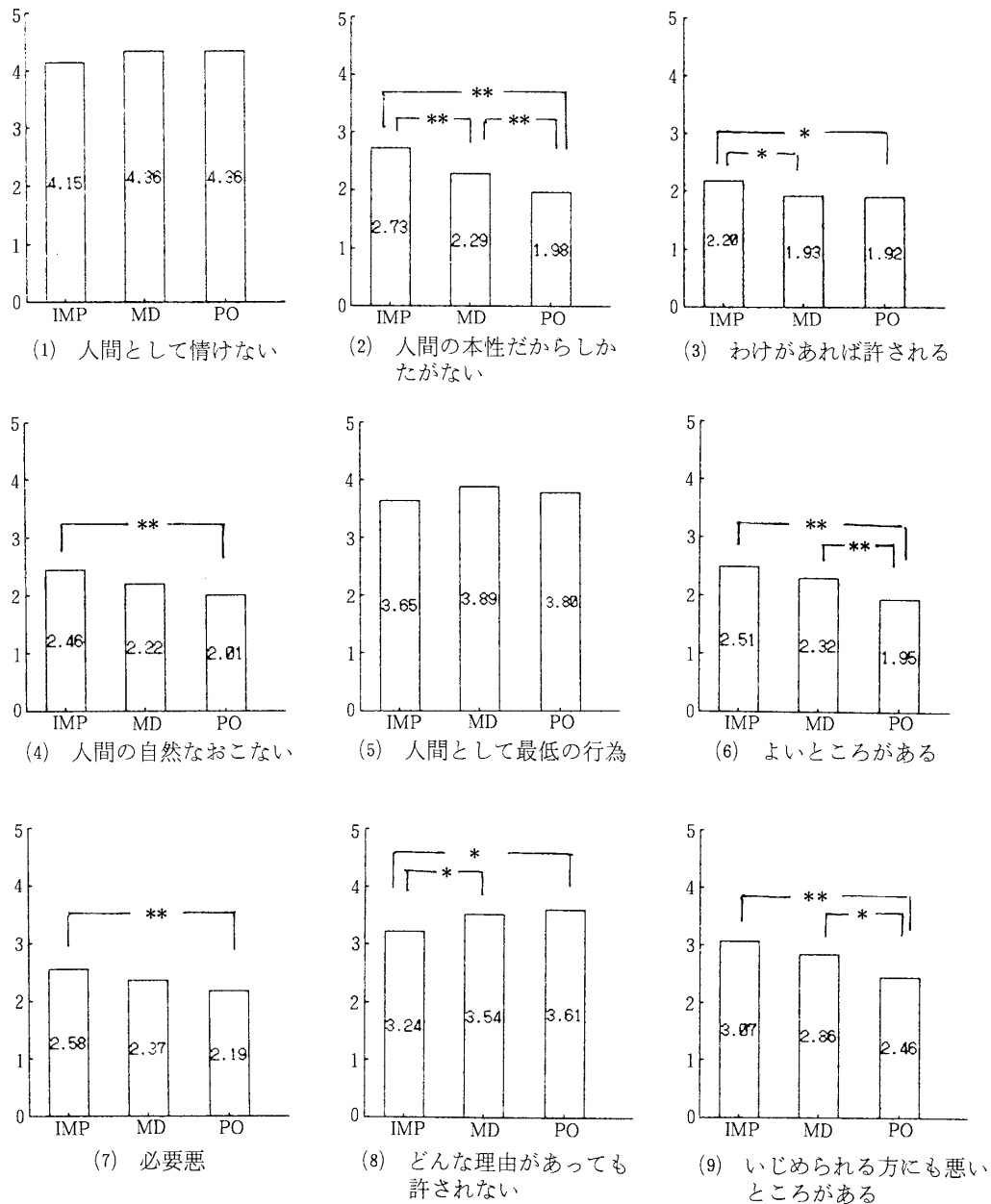
なお、これら⑤の5) 6) 7) の項目も含めて、群の主効果以外に、学年や性の主効果が有意な

表5-2 表5-1の資料にもとづく3要因分散分析の結果 (F 値を示す)

	項目	[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]	[7]	[8]	[9]	[10]	[11]	[12]	[13]
変 動 源	df	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F
学 年 A	2	10.431***	15.784***	0.225	0.665	2.559'	1.043	35.404***	6.938***	1.712	3.981*	2.451'	4.016*	4.120*
性 B	1	3.204'	9.625***	0.382	3.224'	8.085***	11.168***	0.028	4.924*	1.404	4.223*	4.768*	0.505	0.049
群 C	2	0.035	0.087	0.134	0.065	7.468***	2.740'	7.278***	1.709	0.360	1.249	1.412	1.231	0.499
A × B	2	0.987	1.813	1.483	0.251	0.181	0.333	0.119	1.779	1.099	1.015	1.308	6.634**	3.032*
A × C	4	1.117	1.386	0.405	0.251	2.187'	2.040'	2.667*	0.589	2.086'	0.807	1.313	1.239	2.235'
B × C	2	0.420	1.018	0.513	5.251***	0.461	1.191	0.365	1.977	0.246	1.260	1.873	2.110	1.039
A×B×C	4	0.534	0.222	2.986*	2.916*	1.510	1.278	1.185	1.925	1.182	0.169	0.418	2.589*	1.284
誤 差	513													

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

ものがあることが表5-2に示されている。具体的に言えば、1) 友達への同調、2) 学校での出来事の家人への報告、3) 学校で認められているとの感触、4) 自分自身より自分のまわりの人々の方が幸せに見える、8) 性悪説、9) 苦しいことへの挑戦、10) 協調と忍耐、11) 大勢での遊びよりひとりの遊び、12) 村八分もしかたがない、13) 異質の排除(排他性)の各項目については、学年、性の主効果が有意であったが、とくに、「学年」に関していえば、学年があがるにつれて、その項目への賛成度が上昇するか、下降するか直線的な傾向がうかがえたのは、わずかひとつ遊びの項目くらいのものであった。ちなみに、この項目に関しては、えられたデータからのみのものであるが、学年の低い小学4年生がこれを否定する傾向が弱く、中学生がこれを否定する傾向が強くなる傾向が出ている。



* $p < .05$ ** $p < .01$ (Tukey 法による平均の多重比較)

図1 いじめ根絶視各群と、いじめについての意見への反応(得点幅1~5)
(得点が高いほどその意見に賛成の度合いが高い)

なお、調査項目⑥及び⑦についての分析検討の結果の報告は別の機会におこなうこととし、本報告では割愛させていただく。

考 察

いじめに対する根絶可能・不可能の視点がいじめの心理力動の解明に何らかの力を借してくれるものと期待して筆者はこれまでも小学生から中学生、大学生、教師までの広範囲にわたる被調査者からの資料を得てその分析検討につとめてきた。

今回の調査で、「いじめられた経験、いじめを見た経験」の有無には上述の根絶視3群間に差がなかったが、「いじめた経験」にIMP群が他の2群に較べて有意に高率であるとの検定結果が得られたときに驚きを禁じえなかった。もちろん、「いじめはなくなるはず」と思っている子ども達が、即、いじめの主体者になりやすいなどというようにしているわけではないし、ましてや、いじめ根絶不可能と考えることが、悪いなどというようにしているのでは決してない。いじめ根絶不可能視(IMP)と、いじめの行為そのものとの間の因果関係は未だに不明である。

もうひとつの驚きがあった。それは、昨年にまとめた大学生、現職教師たちの根絶視群別による、いじめの他の意見に対する反応と今回の、小・中学生による反応とがあまりにも、その傾向において、酷似しすぎていることである。何がこのいじめ根絶視の視点の背後に潜んでいるのであろうか。

また、日常生活の場面や人間観についての応答の中で、「人間はもともと(うまれた時から)よいところをもっている」といういわば性善説的人間観については、PO群つまりいじめ根絶可能視群が他の2群を有意に大きく引きはなして高い賛意を示した点にも強く注目したい。「問題」のところで述べた様に、この研究は筆者の従来の研究の行き方に、新しく「価値観」「人間観」などを加え、その第一歩をふみだしたものである。いじめが人の生きゆく過程において心に傷を残すいわば人の心の深い所にくい込むものであるだけに、価値観、人間観など、人間存在の極めて深い次元とのかかわりを避けて通れないところに逢着したという強い思いにかられている。今後ともひきつづいて努力を傾けていきたい。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、調査に御協力くださった小学校・中学校の教師、児童・生徒の皆さんに厚く御礼申し上げます。また、本学部助教授篠原弘章氏によるコンピュータ・プログラムを使用させていただきました。記して感謝の意を表します。調査の教示者として、また、資料整理の援助者として積極的に助力してくれた本学部心理学専修学生諸氏にも心から謝意を表します。

文 献

- 遠藤豊吉・NHKおはよう広場班 1984 弱いものいじめ—教室からの報告—日本放送協会
深谷和子編 1986 いじめ—家庭と学校のはざま—現代のエスプリ No. 228

- 古畑和孝 1985 a “いじめ”の構造を探索 学習指導研修 8(2), 42-48.
- 古畑和孝 1985 b 現今の教育問題と社会心理学よりの提言 ―日本社会心理学会特別報告― 児童心理39(16), 195-204
- 古畑和孝 1986 「いじめ」問題再考 ―鈴木康平・小倉寿男両氏の問題提起を受けて― 学習指導研修 8(11), 45-48
- 稲村 博 1985 いじめの心理と病理 ジュリスト No.836 23-28.
- 桂広介・長島貞夫・真仁田昭・原野広太郎編 1985 いじめを超える！ ―105人提言集― 児童心理 39(13)
- 森田洋司 1985 学級集団における「いじめ」の構造 ジュリスト No.836 29-35
- 文部省編 1984 小學校生徒指導資料 3 児童の友人関係をめぐる指導上の諸問題 大蔵省印刷局
- 文部省編 1985 生徒指導資料第2集 生徒指導の実践上の諸問題とその解明 大蔵省印刷局
- 西日本新聞社社会部取材班編 1985 弱者いじめ 西日本新聞社
- 大西誠一郎 1971 現代青年の特質 大西誠一郎・武上薫共編 現代青年の心理 改訂版, 黎昭書房 7-29
- 佐藤勝利 1987 青年と学校 鈴木康平・松田惺編 現代青年心理学 有斐閣 131-148.
- 篠原弘章 1984 a 行動科学の BASIC 第1巻 統計解析 ナカニシヤ出版
- 篠原弘章 1984 b 行動科学の BASIC 第2巻 実験計画法 ナカニシヤ出版
- 篠原弘章 1989 行動科学の BASIC 第5巻 ノンパラメトリック法 ナカニシヤ出版 18-29.
- 鈴木康平・佐藤静一・篠原弘章・吉田道雄 1986 いじめの社会心理学的研究 熊本大学教育学部附属教育工学センター紀要 3, 97-115.
- 鈴木康平 1986 a “いじめ”の背景・動機・対策 学習指導研修 8(11), 34-39.
- 鈴木康平 1986 b いじめの心理 ―原因・動機と指導― 日本心理学会第50回大会 発表論文集 s. 38.
- 鈴木康平 1987 現代社会といじめ再考 教育心理 35, 762-767
- 鈴木康平 1989 a いじめに対する小・中学生の認識 熊本大学教育実践研究 6, 61-81
- 鈴木康平 1989 b いじめに対する教育学部2年次生・教育実習生・現場教師の認識 熊本大学教育学部紀要 人文科学 38, 257-270.
- 鈴木康平 1989 c いじめに対する態度 九州心理学会第50回大会発表論文集, 13
- 鈴木康平・田口広明・高木恵子 1989 a いじめに対する意見と原因の認識 [1] 日本グループ・ダイナミックス学会第37回大会発表論文集 129-130.
- 鈴木康平・田口広明・高木恵子 1989 b いじめに対する意見と原因の認識 [2] 日本グループ・ダイナミックス学会第37回大会発表論文集 131-132.
- 詫摩武俊 1984 こんな子がいじめ、こんな子がいじめられる 山手書房
- 續 有恒・久世敏雄・秦 安雄 1959 青年期の生活意識について 名古屋大学教育学部紀要 5, 170-177

付 録

いじめと生活態度についての調査

いじめと日頃の生活態度についていろいろとおたずねします。みなさんのこたえは、まとめて集計します。個人にご迷惑をおかけしません。ありのままに書いてください。みなさんの名前も書く必要はありません。

熊本大学教育学部心理学研究室 鈴木康平

____ 学年 男 ・ 女 (どちらか○でかこむ)

- ① あなたはこれまでに、いじめられたことがありますか。(下の ある, ないのどちらかを○でかこむ)

ある ない
└─→ いつごろ _____

○どのようにいじめられましたか。 _____

- なぜいじめられたのですか _____
(ひとつに○印)
- ア. 自分にわるいところがあったから
 - イ. 相手がわるかったから
 - ウ. 何が原因(もと)でいじめられたのかわからない.
 - エ. その他(具体的に書く _____)

○いじめられた時の気持ちはどのようなでしたか。もっとも強くかんじたものひとつに○印をつけてください(アからオまでにあてはまるものがない人は、その他のところに○をつけ、カッコの中に具体的に書いてください)。

- ア. くやしかった
- イ. さびしかった
- ウ. かなしかった
- エ. しかたがないと思った
- オ. いじめられてあたりまえと思った
- カ. その他(具体的に書く _____)

○その時どうしましたか。(下のアからカまでのうち、ひとつに○印)

- ア. そのままだまってひきさがった
- イ. すぐにしかえしをした
- ウ. しかえしをしたかったけれど、わざとしなかった
- エ. しかえしをしたかったけれど、こわくてできなかった
- オ. 人(先生, 親, 友だち, きょうだい)にしらせた(カッコの中の人物に○印)
- カ. その他(具体的に書く _____)

- ② あなたはこれまでに、いじめをしたことがありますか。（どちらかを○でかこむ）

・ある ・ない

└─ izzoo _____ ・どのようにしていじめたのですか。 _____

- なぜいじめたのですか。（ひとつに○印）

ア．相手にわるいところがあったから
イ．自分がわるいとはわかっていたがいじめた
ウ．何もわけはなくてただなんとなくいじめただけ
エ．その他（具体的に書く）

- いじめた時どんな気持ちがしましたか。（下の中からあてはまるものひとつに○印をつける）

ア．これで相手がよくなればよいと思った
イ．すかつとした
ウ．さびしかった
エ．かなしかった
オ．しかたがないと思った
カ．その他（具体的に書く）

- ③ あなたはこれまでに、いじめを見たことがありますか。（どちらかを○でかこむ）

・ある ・ない

└─ izzoo _____ ・それはどのようないじめでしたか。 _____

- なぜ、そのいじめがあったのですか。（下の中であてはまるものひとつに○印）

ア．いじめられた子にわるいところがあったから
イ．いじめた子がわるかったから
ウ．なんでそのいじめがおこったのかわからなかった
エ．その他（具体的に書く）

- その時いじている子の気持ちはどのようなだったでしょう？（下の中であてはまるものひとつに○印）

ア．これで相手がよくなればよいと思っているようだった
イ．すかつとしたようだった
ウ．さびしうだった
エ．かなしうだった
オ．しかたがないと思っているようだった
カ．その他（具体的に書く）

○その時いじめられている子の気持ちはどのようなものでしょう？（下の中であてはまるものひとつに○印）

- ア．くやしそうだった
- イ．さびしそうだった
- ウ．かなしそうだった
- エ．しかたがないと思っているようだった
- オ．いじめられてあたりまえと思っているようだった
- カ．その他（具体的に書く）

そのいじめを見た時あなたはどうしましたか．（下の中からあてはまるものひとつに○印）

- ア．すぐにいじめをやめるように注意した
- イ．いじめをやめるように注意しようと思ったがしなかった（それは　　だからです）
- ウ．何もしようとせず、だまって見ていた
- エ．ほかの何人かの友だちとおもしろがって見ていた
- オ．すぐにほかの人（先生、上級生、同級生、親）にしらせにいった（カッコの中の人物に ○印）
- カ．見て見ぬふりをしてとおりにすぎた
- キ．その他（具体的に書く）

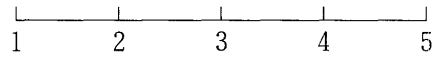
4) いじめについていくつかの考え方があります．下を書いてあるそれぞれの考え方について、あなたはどのくらい賛成ですか、反対ですか、あてはまるところの数字を○でかこんでください．

（1，2，3，4，5のどれかひとつに○）

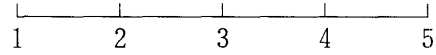
1) から10) までひとつずつつけてください．

- | | お
は
お
ん
い
た
に
い | ま
は
あ
ん
た
い | ど
い
ち
え
ら
な
い
も | ま
さ
あ
ん
せ
い | お
さ
お
ん
い
せ
に
い |
|--|--------------------------------------|----------------------------|--------------------------------------|----------------------------|--------------------------------------|
| 1) いじめは人間のひどい心のあらわれで、人間としてなすべきなおこないです。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2) いじめは悪いことだけれど、もともと人間の心のなかにある気もちだから（いじめがあっても）しかたがないことです。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3) いじめは、いじめるわけがしっかりしている時は、（いじめを）ゆるされます（いじめてもよい）。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4) いじめは人間のしぜんのこないで、よいとか悪いとかの問題ではありません。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5) いじめは人間として、最低のこないです。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6) いじめは人間の自然のこないで、いじめられる方が、それによってかえって強くなっていくので、よいところがあります。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

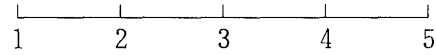
7) いじめは悪いことですが、いじめられる方もそれによって強くなっていくのだから必要なところもあります。



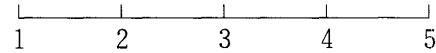
8) いじめは、どんなわけがあっても、ゆるされません。



9) いじめは悪いことですが、いじめられる方にも、悪いところがあるはずですから（いじめがあっても）やむをえません。



10) いじめは人間のいるところには、かならずあり、決してなくなりません。



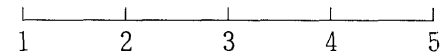
あなたの、「いじめ」についての考え方を書いてください。

いじめは

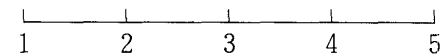
5) つぎのようなことについて、それぞれの項目ごとにあてはまる数字を（1から5）のうちひとつずつ○でかこんでください。

ぜんぜん そうぜん ではない	あまり とりそ でない	どちら いえ ないとも	まあ その とおり	ま った その とく とおり
----------------------	-------------------	-------------------	-----------------	----------------------------

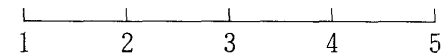
1) クラスのきまりをつくる時など、みんなが賛成するならば、自分は反対でもそれにしたがう。



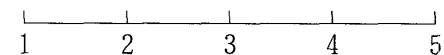
2) 学校であったおもなできごととは家のひとたちに話す。



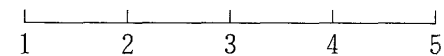
3) 自分は学校では、みんなから認めてもらっている。



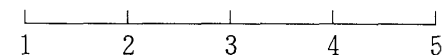
4) 自分のまわりの人々はたいてい自分より幸せそうにみえる。



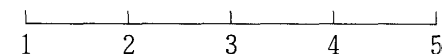
5) クラスのある人がとてもよい成績をあげたらうれしい。



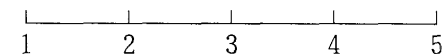
6) クラスのある人がとてもおおきな失敗をしたらかない。



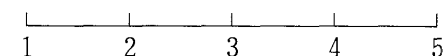
7) 人間はもともと（うまれた時から）よいところをもっている。



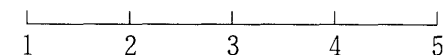
8) 人間はもともと（うまれた時から）わるいところをもっている。



9) 苦しいことにもあえてたちむかう。



10) 友だちみんなと仲よくしていくためならば、自分のしたいこともしないでがまんする。



- 11) 友だちみんなとわいわいさわいで遊ぶより、ひとりでファミコンをしているほうがよい。
- 12) なかまに、とけこめない人は、なかまはずれになってもしかたがない。
- 13) みんなとちがうことをする人は許せない。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

⑥ 下にあげた項目の中、あなたがもっとも大切だと思う生活の順に 1, 2, 3, … 6 と番号をつけてください。

- () 金を自由に動かし、富をたくわえることのできる実業家のような生活
- () 社会のために奉仕し、人々に役立つ生活
- () 学問を愛し、あくまで真理を探究する生活
- () 政治家になり、国の政治を指導できる生活
- () 美を愛することのできる、芸術家のような生活
- () 神仏を信じ、神仏の意志に従い、世の中をよくする宗教家のような生活

⑦ あなたは、次にあげた生活態度のどれにもっとも強く魅力を感じますか。もっとも強くそう思うものを 1 位にして 1, 以下 2, 3, … 6 と順番をつけてください。

- () 一生けん命働いて金持になる
- () まじめに勉強して名をあげる
- () 自分の趣味にあった暮らしをする
- () その日その日をのんきに暮す
- () 世の中の不正とたたかい清く正しく暮す
- () 自分ひとりのことを考えず社会のためにすべてを捧げて暮す

上に書いてあるもの以外で自分にとってもっとも魅力のある生きかたがある人はそれを書いてください。

⑧ つぎにあげる項目の中、あなたの幸福にとって、もっとも重要と思われるものを三重丸◎、つぎに重要なものを二重丸◎、そのつぎのものを一重丸○でかこんでください。さらに、一番重要なもの(◎印でかこんだもの)をえらんだわけを書いてください。

芸術 安らかな心 経済的独立 娯楽 自由
 友情 健康 働くよろこび 知識 愛
 金銭 名声 権力 宗教

それが幸福にとってもっとも重要なわけ(理由)

—— ご協力ありがとうございました ——